佐原の町並み かわら版

第　４７　号
平　成２３年　２月
発　行　NPO法人小野川と佐原の町並みを考える会
佐原町並み保存会
お問い合わせ　佐原町並み交流館
☎ 0478(52)1000

佐原の歴史といまの活動を次の世代・子供たちへ伝えたい

～二十年史、ＤＶＤ映像とガイドブックの制作～

二十年史発刊される

ＮＰＯ法人「小野川と佐原の町並みを考える会」が設立され十年目に刊行された「町づくり十年の歩み」には、町並み保存の活動が、その発端から余すところ無く詳細に記述されている。

二十周年を迎えた昨年は、その後の十年を記録する「二十年史」執筆のための作業が地道に続けられた。

幸い、高橋賢一理事長が中心となり資料収集に努力し、「全国町並みゼミ盛岡大会」に間に合って完成させることができた。

私たちＮＰＯの貴重な活動がしっかりと記録・保存されていくことの意義は大きい。

ＤＶＤの制作はじまる

今年度に入り、小学四年生の社会科学習のためのＤＶＤ制作がはじめられた。

旧宅内でのDVDの撮影

佐原の町並み保存と町おこしを学習するために佐原を見学に訪れる小学生が多いが、予備学習なしでは、十分な学習は望めない。

ぜひ事前に教室で予習してもらう必要があるという理由で、町並み保存とまちづくりとの結びつきをやさしく解説することを試みた。

商業の町・佐原の歴史、伊能忠敬の偉業、夏・秋の山車祭、佐原の自然などを映像で残そうと脚本化し撮影に取り組んだ。

この一年間、「しま・ワークス」に制作を依頼した。猛暑や大雨ありの過酷な撮影状況ではあったが、その努力がいよいよ実る。

ガイドブックの発行

また、手に持って歩ける体裁のガイドブックがほしいという提案もあって、編集会議をたちあげ、構想の実現に取り組んできた。

町並み案内は、ガイドだけでは希望者全員に対応できないのが現実である。そこで、町並み案内で蓄積した知識と経験をまとめようと資料収集に取り組んできた。

編集・校正が進んでいるが、編集会議の場では、一冊の本の体裁で出版するという方針であったが、膨大な内容の記述を整理する必要もあるため、まずは、私たちＮＰＯ会員の学習に資する形にまとめあげて完成させる予定である。

祝　第一回「地域再生大賞」優秀賞を受賞

ＮＰＯ法人「小野川と佐原の町並みを考える会」が、共同通信社と加盟新聞四六紙が主催する、第一回「地域再生大賞」の優秀賞を受賞した。地方の疲弊が深刻化するなかで、地域の活性化を目指す取り組みを支援しようと創設された賞で、表彰式は、二月二十三日に東京・都市センターホテルで行われた。

第三十三回全国町並みゼミ盛岡大会の報告

大会は、平成二十二年十一月五日（金）～七日（日）の三日間、盛岡市岩手県公会堂を主会場にして開催され、佐原からは、十二名が参加した。

盛岡でのたくさんの感動

一日目午後の全体会会場である「岩手県公会堂」や辰野式ルネッサンス様式の「旧盛岡銀行」「旧第九十銀行本店（現在、啄木・賢治青春館）」などの美しい堂々とした歴史的建造物のすばらしさにまず感動した。その夜の交流会場となった「大清水多賀」は明治五年創業のレトロな日本建築で、庭園と良く調和した見事な建物であった。二百畳もある豪華な大広間で「里川さんさ」が選ばれ満点の踊りと「盛岡芸妓」の素晴らしい舞踊の披露の後、美味な地酒、ひっつみ汁や三大麺などの豊かな郷土料理のおもてなしも満喫した。

全体会は岩手県公会堂で

辰野式・旧盛岡銀行本店の威容

飛んで跳ねて黒川さんさ

町並み見学

二日目朝、凛と澄み切った空気の中で、雪を頂いた岩木山の勇姿と北上川の清流を真近に見、その美しさに感動した。午前中は、地元ガイドさんの案内で鉈（なた）屋町界隈を見学した。ここは当時の酒蔵や米蔵（現・資料館）、商家、町屋などの一棟毎の規模が桁違いに大きくて、さすがは南部藩であると思った。

盛岡が北上川の舟運で栄えていたことを知り親しみがわいた。

途中の休憩所で地元の皆さんの温かいお振舞いを受けたりの楽しい町巡りであった。

佐原からお揃いの半天で参加

町復活の環境づくり

午後は、原敬の菩提寺・大慈寺で開かれた第二分科会に参加した。「暮らしと文化を活かした環境づくり」がテーマで、どの町も「賑わいがあり暮らしが息づく町の復活」が課題であった。

大人が積極的に地域の歴史や文化遺産の再評価に取り組み、次代を担う子供たちにどう伝えるかを考えながら、各発表を聞いた。結局は、学校と地域の教育力が課題と思われるのだが。

その土地ならではの奥深さに触れた感動一杯の研修であった。

（文責・伊藤待子）

ミニチュア「昭和おもひでバス」が走り出す

佐原の重伝建地区を走っているお馴染みの「ボンネットバス（佐原町並み号）」がミニチュアとなって発売される。タルガ社製。発売は三月末。予価は五五〇円。佐原町並み交流館で販売する。

近日発売の「佐原町並み号」

全体会議開く

平成二三年二月一日（火）午後七時より桶松にて全体会議が開かれ、最近の重伝建地区での観光客の動向を中心に問題点をどうとらえるか等の当面する問題を話し合った。

事務局からは、交流館入場者数の昨年との比較、佐原の歴史と町並みを紹介する映像制作の進行状況、合併五周年記念事業「伊能忠敬まつり」、「散策しながら佐原を楽しむ会」案内人養成事業、電線地中化事業、町づくり二十年史やガイドブック発行などの報告があり、懇談の中では会員から、駐車場の確保、観光客の滞在時間を延ばすにはどうするか、「水の郷」と重伝建地区・観光客との関連、買い物袋にロゴをいれたらいいなど自由な討議があった。

町並みを歩いて 重伝建地区の隠れた魅力を発掘（その六）

佐原には、かつては、沢山の石の建造物があった。しかし、近代化と共に、そのほとんどは暗い路地裏に忘れ去られたり、取り払われて捨て去られ、消えてしまったものが多い。

協橋の橋桁の石柱

佐原を東西に分けて流れる小野川に架かる橋が、香取街道が通過する「忠敬橋」で、ここが重伝建地区の中心であり、佐原では最も重要な橋でもあった。

木造であったものを、明治十五年に、下を舟が通過できるように中心を円く高くした石の太鼓橋（隻眼橋・せきがんきょう）にした。

公の費用をあおがずに町民の寄付と協力とによって造られたので、その名も「協橋（かなえばし）」と名づけた。

百三十年ほど前の重厚な姿そのままに、明治から昭和までその勤めを果した。が、自動車の時代になって耐えられなくなった。

生き返らせたい協橋石柱

昭和四三年にコンクリートに造り変えられて、その名も「ちゅうけいばし」といわれるようになった。

その橋桁の端を守っていた四本の石柱がどこかに消えたのである。幸いにも、うち二本が伊能忠敬旧宅内の軒下に横たえられている。

協橋は、佐原のかつての繁栄の一つのシンボルでもある。

明治の佐原町民の心意気を重伝建地区の一画に再登場させてほしいものである。

香取神宮への道標

かつて、佐原の町から香取神宮へ至る道は、現在の大通りからは随分とはずれていた。

八日市場・前原の「石橋肥料店」の前の角に一本の「香取神社道」の石碑がある。明治二八年に町の有志が建てたもので、ここから佐原高校の方向へ進むのが香取神宮への道であったことを示している。

刀折れ矢尽きた道標

もう一本、「香取道」を示す道標があった。八坂神社の前、「岡沢酒店」の角に立っていたものである。

残念ながら、この道標は、いま、先ほどの道標の奥、八日市場区の山車蔵の横に打ち捨てられている。

明治二十年に建てられたもので、多田郷の書家の文字が刻されている。

石の頭は欠けていて、その部分は、ゴミ捨て場の支柱として役立てられている。

今の世に呼び戻されて生き返った石碑

博打を戒める碑

馬場酒蔵の前の信号角にある「ほてい屋菓子店」の裏に、小さな石碑がある。

かつてここにあった家を改築した際、地中より掘り出されたものという。

天保七年六月十三日の日付のある碑面から想像すると、次の様ないわれがあるらしい。

四軒の商家が共同して「綿」の商売で提携し、順調に行っているので、子孫に現在の親たちの心もちを伝えておきたいと思いたった。その証として家の庭内に石碑を建てた。

文面は、

一条・おごるべからず、必ず其の家永続く。

二条・博打うつべからず、其恨至甚。

三条・罪を作るべからず。子孫愚者生。

佐原は「江戸」あっての町の繁栄であった。舟運によっていた佐原の経済界は、明治期、鉄道の敷設により大幅な転換期を迎えた。

この石碑を建てた「北条野澤本家」が、その後どのように新しい時代をくぐり抜けて行ったかは不明である。

現代にも生きる戒め刻す

観光案内に感謝の礼状（その7）

佐倉市役所の研修で

先般は、当協議会が実施した研修に対しご配慮をいただき、厚くお礼申し上げます。おかげさまで無事研修を行うことができました。

ご説明いただきましたボランティアの方々のような素晴らしい人に会えて、参加者一同絶賛であったとの報告を受けております。

（佐倉市役所市民部）

町たんけんの学習

十一月二日に実施しました生活科「町たんけん」の学習に際し、ご協力いただきありがとうございました。おかげさまで、子供たちは、日頃は目にすることができない所まで探検することができて大喜びでした。

探検後も、発表したり記録したりする姿が生き生きとして、担任一同たいへんうれしく感じました。同封の手紙は、子供たちが感謝の気持ちを込めて書きました。

（佐原小学校々長）

こんどはお母さんと

むかしのしゃしんをみましてとてもおどろきました。べんきょうになりました。

（二年生男子）

こんな大きなぎんこうが

たいしょう三年にこんな大きなぎんこうがあったなんてびっくりしました。

（二年生女子）

とてもおどろいた

ぼくははじめてこうりゅうかんの中にはいりました。いろいろなものがかざってあった。わたしはさわらのことをもっとしりたいです。こんどはお母さんといっしょにしらべにいきたいです。

（二年生女子）

忠敬さんの人柄にふれて

過日の私どものバス視察旅行の際には大変お世話になりました。伊能忠敬という偉人についてこれまで学校の教科書に載っている程度の知識しかございませんでしたが、ガイドの方のわかりやすい説明を受け、また記念館の展示物を拝見するうちに、これまで知りえなかった多くのことを学びとることが出来ました。

とても印象に残りましたことは、忠敬が五十五歳から全国測量を開始したという事実です。かつては人生五十年といわれておりましたが、五十五歳といえば、当時からすればかなりのご高齢ではないかと存じます。

その年齢から新たなことに挑戦するということはものすごいことであり、尊敬に値するものであります。

また小野川沿いを散策しながら、忠敬の旧家を訪ねることもでき、何か江戸時代へタイムスリップしたようでした。

（八街南中学ＰＴＡ研修部）

町並み案内（その八）沢山の人に会えるから楽しい

町並み案内班・白木文子さん

―ボランティア案内に参加するきっかけは。

私も吉田昌司さんの「郷土歴史講座」の受講生で、初めは、三菱館に来て案内班の一人としてやっていました。

佐原が「重伝建」に指定され、小野川沿いに市の観光協会が「佐原観光中央案内所」を開所しましたので、そこに勤めることになりました。

ただ空きの日がありますから、三菱館の案内班の方もお手伝いさせていただいています。

私は歴史が好きなので、ガイドをやっていると佐原のことが色々勉強できるし、喜んでやっていますよ。

―お生まれは。

佐原の生まれですが、佐原について詳しいことはあまり知りませんでしたが、講座を聞いて「ああ、こんなことがあったのか」なんて思い当たることが沢山出てきました。

「天狗党」のことなどは講座で聞いて初めて知りました。

―案内をやってよかったと思えることがありましたか。

案内をするととても勉強になり、同時に郷土について誇りがもてるようになりました。

また、色々な人に会えることがうれしいですね。

特に、研修で他所の観光案内所を訪ねた折など「佐原からですか、佐原では大変お世話になりました」と言ってくださる人が多いのです。そしてボランティアの勉強で佐原へ来たことが話題となります。

その時、講師をつとめた私達のガイドのリーダーである吉田昌司さんのお名前が度々出てきます。

そんな時などは「こうやって佐原が全国の皆さんの役に立っているんだなあ」と思うと、とてもうれしくなるし、誇りにも感じます。

―これからガイドをやってみたいと思っている人に一言。

あまり正面から構えないで気楽に来ていただくといいと思います。

―その他に。

団体でいらっしゃる方々には、もう少し長く佐原に滞在していただきたいです。伊能忠敬の史料が国宝に指定されましたから、佐原をゆっくりと見ていただきたいですね。

きめこまかな説明を心がけて

こんな本はいかが「転換するグリーン・ツーリズム」

グリーン・ツーリズムという言葉が登場したのは、十八年前。当時はまだマス・ツーリズムの時代でしたが、以後、農業や自然を体験する目的とする旅行が注目されるようになりました。

現在は、滞在型のツーリズムやメタボを直すヘルス・ツーリズムまで、様々なタイプのツーリズムへと発展してきています。

この変遷や考え方の中に、「まちづくり」のヒントを読み取ることが出来ると思いますので、ぜひ読むことを推薦します。

また、事務室には沢山の書籍が備えてあります。貸し出しますので申し出てください。

（理事長）